2.　GLC 日本語プログラム開発過程（～2021 年度）

2.1.　はじめに

2021 年度現在、グローバルラーニングセンター（以下 GLC）では、法学部、経営学部、スポーツ科学部在籍の留学生に対する日本語教育を行っている。GLC の日本語教育の目的は、「日本語を母語としない学生が、複言語（母語＋日本語）使用者として、自身の目標達成に必要な日本語力をつけるための、専門的支援を行う」ことである。「専門的支援を行う」ための重要な課題の一つは、YGU に入学する留学生の特徴に対応した日本語プログラムを提供することであり、その開発のための一手段が本 Can-do プロジェクトである。また前章で述べたとおり、GLC 日本語プログラムの課題は、留学生急増に伴う「数」への対応と、日本語教育の「質」転換を同時に行うことであった。GLC 日本語プログラム開発は、日本語教育の質転換の意味合いも持つ。

本章では、2021 年度までの GLC 日本語プログラム開発過程について、二つのステップに分け、それぞれに目指したことを述べる。第 1 ステップは、新日本語カリキュラムを策定し、大学全体の教育課程体系の中に日本語科目を新たに位置づけることであった。これにより、教育課程における枠組みであるカリキュラムが確定した。第 2 ステップでは、第 1 ステップで確定したカリキュラムの中身である各科目を洗練化させていくことを目指している。洗練化とは、ここではシラバスの整備と各科目間及びレベル間のアーティキュレーション [1)]整備を意味する。本報告書では、アーティキュレーションを日本語科目間の相互関連性という意味で用い、次章 3.4.で再び触れる。なお本報告書は、2021 年度に実施した第 2 ステップの進捗成果について報告するものである（第 3 章）が、その前に、第 1 ステップについても触れておく。

2.2.　GLC 日本語プログラム開発過程 1：日本語カリキュラムの改編

GLC 日本語セクションでは、2019 年度に新日本語カリキュラムを策定し、2020 年度より運用を開始した。この改編のポイントは以下の 5 点に集約される。①目的別に各科目の位置づけを明確にしたこと、②レベル別呼称（A～C）の使用を開始したこと、③従来の正課外科目（補講の位置づけ）を廃止し、正課科目として新設したこと（日本語文法、日本語コミュニケーション、日本語語彙）、④資格取得支援強化のため、該当科目を拡充したこと（実用日本語）、⑤出口支援強化のため、該当科目を拡充したこと（アカデミック日本語、キャリア日本語）である。2021 年現在の開講科目は表 1 の通りである。

留学生は入学時に行われる日本語クラス分けテスト（筆記試験と口頭試験）により、A、B、C の 3 つのレベルに分けられる。A は学部の授業受講に支障のないレベル、B は学部の授業受講にやや支障のあるレベル、C は学部の授業受講に支障のあるレベルである [2)]。留学生の多くが中国語圏出身 [3)]で、漢字の意味理解はできても、学部授業で求められる聴解力、文章表現力、口頭表現力等に課題を抱える留学生が多い。レベル別の割合は、2021 年度 4 月の新入留学生のケースでは、A が 15～20%、B が 20～30%、C が 50～60%となり、C レベルが半数以上を占める。こうした事情から、レベルに応じた科目設置が必要とな

り、中でも半数以上を占め、学部の授業受講に支障のある C レベルへの対応が喫緊の課題であった。

表 1　目的・レベル別 GLC 日本語科目一覧

目 的	必修、他	レベル	科 目			
総合日本語	必修	A	日本語Ⅰ	日本語Ⅱ	※ 全員一律履修	
		B				
		C				
補習強化	指定	B	日本語特講Ⅰ	日本語特講Ⅱ	※ 日本語Ⅰ・Ⅱの補習・強化的位置づけ	
		C				
	指定（選択）	C	日本語文法	日本語コミュニケーション	日本語語彙	※ 3科目から2科目を選択
資格支援	指定/選択	(C)	実用日本語ⅠA	実用日本語ⅠB	※ JLPT N2対策	
	選択	(A)	実用日本語ⅡA	実用日本語ⅡB	※ JLPT N1対策	
出口支援	選択	(A)	アカデミック日本語ⅠA	アカデミック日本語ⅠB	アカデミック日本語ⅡA	アカデミック日本語ⅡB
	選択	(A)	キャリア日本語ⅠA	キャリア日本語ⅠB	キャリア日本語ⅡA	キャリア日本語ⅡB

日本語科目は 4 つの目的別に設置されている。即ち 4 技能を総合的に伸ばすことを目的とした「総合日本語」、B・C レベルを対象とした「補習強化」、日本語能力試験合格或いは日本語能力試験内容の運用力強化を目指す「資格支援」、そして卒業後の進路を見据えた「出口支援」である。「総合日本語」の科目は日本語I・II（週に 2 コマ）で、全員一律必修となっている。「補習強化」の科目には、日本語特講I・II（週に 2 コマ）、及び日本語文法・日本語コミュニケーション・日本語語彙（週に 1 コマずつ）があり、日本語特講I・II は B・C 両レベルが「指定科目」として、日本語文法・日本語コミュニケーション・日本語語彙は C レベルが 3 科目のうち 2 科目を「指定（選択）科目」として、受講することになっている。「資格支援」の科目としては、実用日本語IA/B（日本語能力試験 N2 レベル）及び実用日本語IIA/B（日本語能力試験 N1 レベル）が、それぞれ週に 2 コマ開講されている。資格支援科目は、選択科目として誰もが履修可能であるが、C レベルの留学生にとっては、「指定科目」となっている。「出口支援」科目には、卒業後大学院進学を目指す留学生のためのアカデミック日本語IA/B・IIA/B、卒業後日本での就職を希望する留学生のためのキャリア日本語IA/B・IIA/B が、開講されている（それぞれ週に 1 コマ）[4)]。

以上の履修イメージをまとめると、図 2 のようになる。

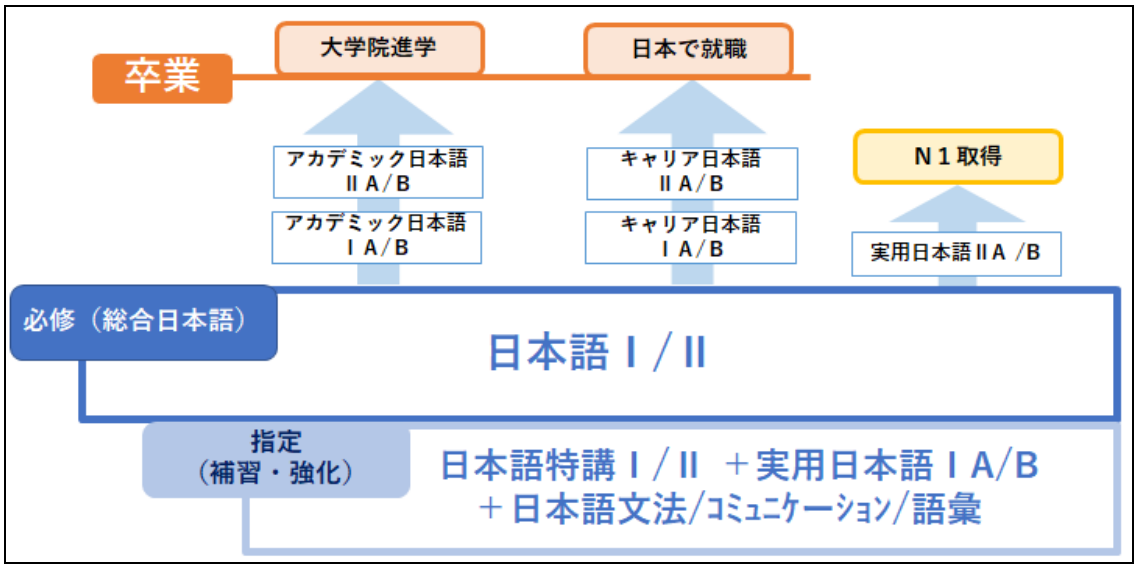

図 2　GLC 日本語科目の履修イメージ

第 1 学期目に最低履修しなければならない、或いは履修を推奨されている日本語科目の単位数はレベルによって異なり、それぞれ A レベルが 2 単位、B レベルが 4 単位、C レベルが 8 単位となる。これらの科目提供を通じ、留学生の学部授業受講における支障を少しでも軽減することが、日本語科目に求められる役割である。

2.3.　GLC 日本語プログラム開発過程 2：科目内容の洗練化

図 3 は、レベル別に履修可能な日本語科目を示したものである [5]。

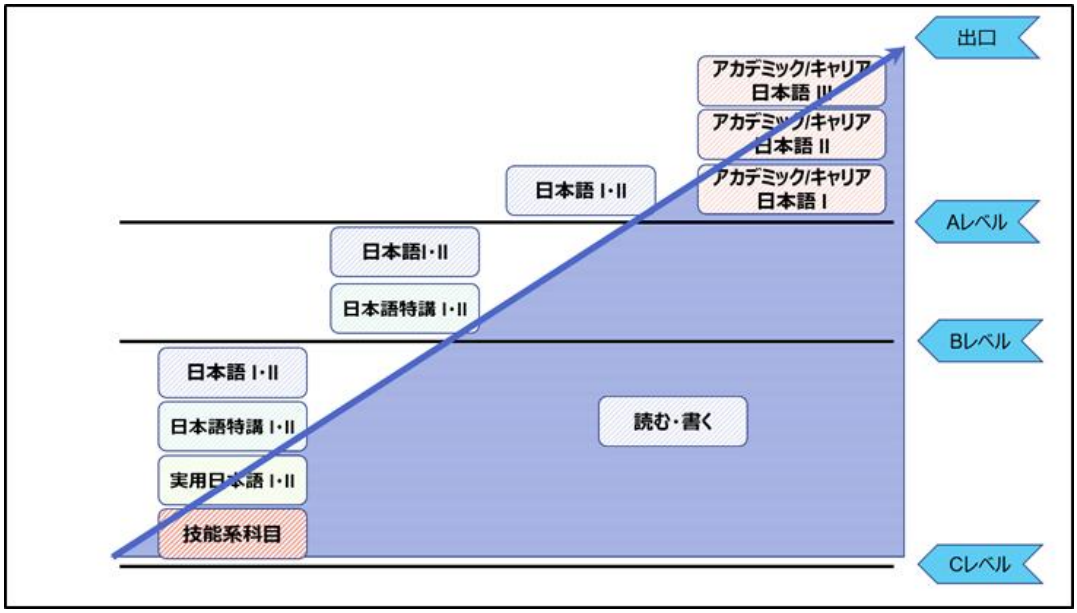

図 3　レベル別日本語科目

これらの科目のうち、2021 年度は日本語I・II（A レベルのみ）[6]（次章 3.2.参照）、技能

系科目（日本語文法・日本語コミュニケーション・日本語語彙）（次章 3.3.参照）、全レベルに関わる「読む・書く」（次章 3.5.参照）に取り組んだ。日本語I・II（A レベル）に取り組んだ理由は、この科目が出口支援につなげる際の必修科目として、重要な意味を持つためである。技能系科目（C レベル）に取り組んだのは、新入留学生の半数を越すこの C レベルにおいて、実用的な日本語の基礎力固めを行う必要性が大いに認められるものの、いわゆるオーソドックスなプログラム設計では効果が得られないという現実に直面したためである。オーソドックスな日本語プログラムとは、①日本語能力試験に基づくレベル設定、②4 技能総合科目や 4 技能の目的別科目（「読解」「聴解」「口頭表現」「ライティング」等）設置、③教科書の選定、④教科書に基づいたシラバス作成を経て教育実践を行うようなプログラムを想定している。GLC 日本語プログラムも日本語カリキュラム改編後はオーソドックスな科目内容に近い状態で開始したが、前述のとおり、期待される効果に結びつかないという現実に直面し、科目内容の開発の必要性が重要な課題として教員間で共有された。「読む・書く」に関しては、入口（入学時）における現実を踏まえ、出口（大学院進学）までの間にどこまでを目指すかという観点から、整理することとした。日本語以外の学部授業を入学と同時に受講する留学生にとって、「読む・書く」は、授業時間外の課題として与えられることが多いが、唯一日本語科目だけが留学生の能力に合った指導が可能であることから、YGU 留学生のレベルに対応した段階に整理することにより目標を可視化し、共有することで他科目とのアーティキュレーション整備の元となることを目指した。なお、「聞く・話す」については、授業時間内に求められる技能であるため、授業活動の点から扱うこととした（次章 3.2.参照）。

注

1）アーティキュレーションの源義や、第二言語習得・言語教育の分野での概念化や適用については、宮崎（2013）を参照。本報告書も日本語プログラムへの適用の一例と位置づけられる。

2）入学試験では、日本語能力試験 N2 相当が求められており、「思考力」「日本語基礎能力」「面接」の 3 項目により判定される。

3）アスリート留学生を除く 2021 年度 4 月入学留学生の国籍は、中国 138 名、ベトナム 5 名、台湾と韓国が各 1 名で、中国からの留学生が 95%以上を占める。

4）「アカデミック日本語IA/B・IIA/B」及び「キャリア日本語IA/B・IIA/B」は、2021 年度までは他の日本語科目同様週 1 回の授業あたり 1 単位科目であったが、2022 年度より 2 単位科目となる。「アカデミック日本語III」と「キャリア日本語III」は、2023 年度以降開講予定である。

5）日本語能力試験 N1 対策を主目的とする「実用日本語II」（選択科目）は図 3 に含めていない。

6）日本語I・II（A レベル）の取り組み詳細については、河野（2022）を参照。

参考文献

河野　礼実（2022）初年次留学生を対象とした大学密着型日本語科目の取り組み　国際共修・語学教育実践, *創刊号*, 5-12.

宮崎　聡（2013）グローバルレベルと市民レベルで協同実践する行為主体者 (アクター) から捉える新たなアーティキュレーションの提唱　早稲田大学大学院教職研究科紀要, 5, 29-44.
https://waseda.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=10725&item_no=1&attribute_id=162&file_no=1

文責：齊藤眞美